

とうきょう すくわくプログラム活動報告書

1. 活動のテーマ

光と影

<テーマの設定理由>

当園は園舎に入ると、目の前の廊下から真っ直ぐ2階に繋がる階段があり、大きな吹き抜けの空間が広がり、2階からの光を常に感じられる。また、保育室の窓からは季節や天気により移り変わる自然光が入り込む環境がある。

光は子どもたちが日常で触れる身近なものであり、日頃の天井に移しだされる光や光の反射に興味をもっている姿が見られることから、光によって生じる様々な現象や特性について、子どもたちの興味関心をさらに深めていきたいと考え、このテーマを設定した。

2. 活動スケジュール (3歳児クラス)

	活動内容	時間	人数
6月～	水遊び ①		全体
9月	影絵遊び ②		全体
11月	サンキャッチャー③		3-4人
12月	風船遊び④		全体

3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

(活動のために準備した素材や道具)

遮光カーテン、鏡、スポットライト、懐中電灯、光を透過する素材、光を透過しない素材、スクリーン、透ける布、ライトテーブル、サンキャッチャー、動物フィギュア、ミラーシート

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

保育室内に差し込む太陽光がどこからきて、何に反射しているのかを探す。鏡を用いて光の屈折や反射などを試したり、様々なものが生み出す陰からイメージを膨らませたりし、光と様々なものの関係性と変化について探求する。

<問い>

(反射の)光はどこからきているのかな?なんで光るのかな?(反射物を)動かしたらどうなるのかな?どうして光が動くんだろう?他の場所だとどうだろう?どうやったら・どんな物だと光るのかな?なんで、色(色の影)がついたんだろう?なんの影かな?どんな影ができるかな?

<環境>

各クラス(遮光カーテン)、鏡、スポットライト、懐中電灯、CD、光を透過する素材、光を透過しない素材、スクリーン、透ける布、ライトテーブル、サンキャッチャー、動物フィギュア、ミラーシート

<記録>

様々な素材を使って、光と影を探求する姿や子どもたちの言葉を写真や動画やメモで記録する。ドキュメンテーションを作成し、クラス内に掲示する。

<振り返り・共有>

ドキュメンテーション通して子どもたち同士や保護者、保育者、他クラスの子どもたちと個々に対話をする。記録した写真や動画、ドキュメンテーションを見て振り返りながらクラス全体に対話をする。職員会議にて各クラスでの活動の共有を行い、意見交換を行う。

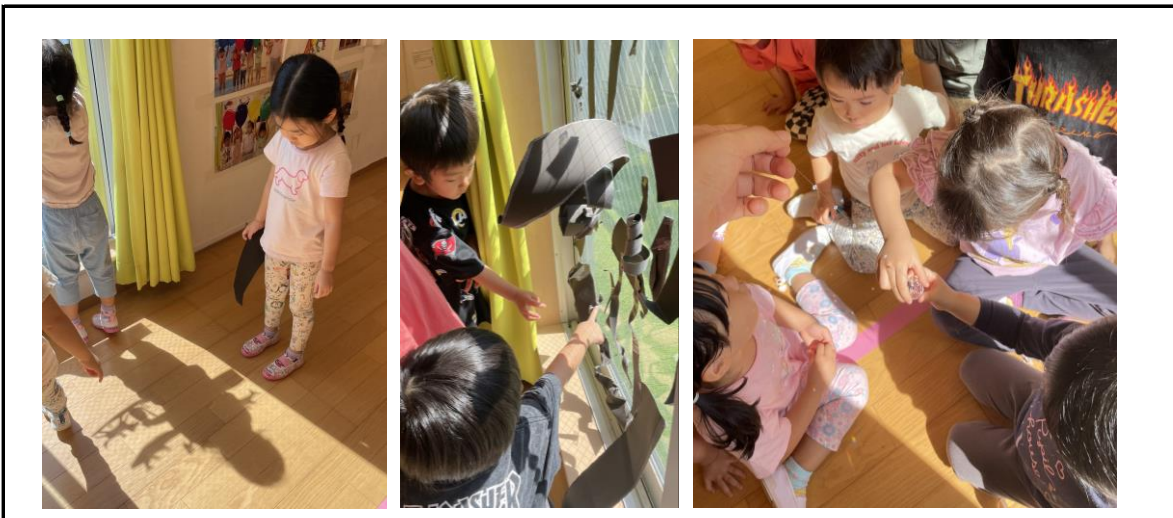
<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

①水遊びをする中で天井に水が映し出される様子を発見し、水遊びを行う度に天井を観察をし「前と違う！大きくなって」などという発見する様子がみられた。タライに溜めた水が天井に反射しているのを見つけて「かめれおんせん」と絵本の内容とリンクさせていた。室内でも光の入り方で天井に模様ができていることを発見することもできた。(8/27)

②室内の光を使って影絵遊びをする。黒い紙を見せ「何に見えるかな？」の問いかけに「お山みたい」「くじらみたい」「お船みたい」など見立てが始まり、自分の思う形に破り窓に貼り付けていく中でそれが影となり映し出される。そこからまたストーリーを考え破いた紙を組み合わせて表現する姿がみられた。

③カーテンを閉めた隙間から、サンキャッチャーの光が入り虹の光の粒が部屋中をくるくる回っているのに気がつき喜ぶ。光を捕まえようとしたりカーテンを揺らして光を動かしたりする。

④よく遊んでいる風船遊びに加え、光遊びも取り入れ融合させて遊んでみた。子どもたちはどちらの遊びも日頃から大好きなため関心を持って意欲的に遊びこむ姿が見られた。それぞれ光を見つけるポイントにも違いがあった。光を見つけた時の表情からも宝物を見つけたようだった。ロッカーの中の布に虹色の光をみつけ「あった！」角度が変わると光は消えて「あれ？ない！どこいった？」と布を動かし、中を探し続け、探している間にまた光が布に映ると「あったー！」と再び発見する様子がみられた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

子どもたちは、光や影、水の反射など日常の中にある自然現象に自ら気づき、繰り返し観察したり試したりしながら興味を深めていた。保育者がこたえを伝えるのではなく、「どうしてだろう？」「何に見えるかな？」と問いかけることで、子ども自身の発見やイメージが広がっていくことを改めて感じた。また一人の発見が周囲の子どもたちへ伝わり「やってみたい」「探してみたい」という姿につながっていた。

遊びの中で友だちと共感したり、言葉を交わしたりしながら遊びが発展していく様子が見られ、光は形が変わったり消えたりするため、不思議さや面白さを感じやすく、子どもたちは「見つけた」「なくなった」と繰り返す姿が印象的だった。身近な環境を少し工夫することで、子どもの探究心や表現力を引き出せることに気づいた。

今後も子どもたちの「なんだろう」「やってみたい」という気持ちを大切にしながら自然現象や感覚遊びを取り入れ、主体的に遊びこめる環境を工夫していきたい。